

【②見方や考え方—C：芸術家や職人の視点】

■「おさかなさんこんにちは」から見えるもの

何年たってもその作品の見え方は不思議な感じがする。

そんな1枚の作品と出会えたのは24歳の時であった。その出会いは家庭訪問の時、私は玄関に「おりがみ」という吹付の作品が飾ってあるのに気付いた。その作品には小さく切った折り紙が、いろいろな曲がりの形となって散らばっている様子を画面の中に表現してあった。その作品の印象は、不思議な感じに見え、なにげなく散らばっている折り紙片が美しく、安定した感じに見えていた。聞くところによると、それを創られたのは画家であるご主人だということだった。

このことがきっかけで、私は休みの日に「おりがみ」を求め、改めてそのお宅を訪ねて行った。そこでは同じ表現技法で作られた別の作品をたくさん見せてもらったが、一番気に入った「OSAKANASAN KONNICHIIWA (おさかなさんこんにちは)」を求めることにした。

その絵は、眼があるところから見れば画面の全体が魚に感じる。真ん中のレコード盤のような、見方を変えれば、大きな眼のようなものがある。これが魚の目だ。そう考えると、水色の左側の丸まっているのは鯨のしっぽに見える。



釣竿のようなものがある。これは、釣り人が魚を釣ろうとしているのかもしれない。あの大きな眼が骸骨のように見えて少し異様な感じに見える時もある。ギザギザの様相がこわい口のようにも見える。けれども、そう見えない時もある。

色使いは明るい配色で、見ていて楽しくなるようで飽きない。ギターのような形をしたものにはアンテナのようなものもついていて、音が出てくるような感じがする。

このように、自分の気持ちの持ちようによって、見え方が変化するこの作品は、今でも「このように見る」という決まったものがない作品である。だからこそ不思議な感覚で作品を見ることができる。

子どもたちの作品の中にも、このような感覚の作品が多く見られるのを造形の授業で感じている。この作品の作者「池上ねんき」さんは子どものみずみずしい感性で創作されているので、このような表現をされているのだろうと感じる。

このような不思議な感覚を子どもの鑑賞の授業や造形の授業に取り入れていきたいものである。

いわ せ まさゆき  
(岩瀬正幸：神奈川県茅ヶ崎市立円蔵小学校教諭)